

「かたこと」の補遺といわれる 浮世鏡第三について

白 木 進

目 次

- 一、最初の「浮世鏡第三の活字化本」と木版原本
 - 二、浮世鏡第三の内容項目と「かたこと」の関連
 - イ、浮世鏡第三が「かたこと」補遺といわれる所以
 - ロ、浮世鏡第三と「かたこと」の関連
 - 三、浮世鏡第三と不重宝記大全との関連
 - イ、不重宝記大全について
 - ロ、不重宝記大全の第八「諸国かたこと」は、浮世鏡よりの抜萃
- 一、最初の浮世鏡第三の活字化本と木版原本
- 浮世鏡第三の内容や価値を一般に始めて紹介したのは、昭和六年十月、古典全集第四期刊行本の一として、かたこと並びに浮世鏡第三が活字化された時、新村出博士が巻頭に先ずかたことを解題し、その末尾に浮世鏡に触れた左の記事である。
- さて「片言」刊行後凡そ数十年も経ってから出版された所の「片言補遺」ともいふべき、やはり横綴の小さな版本が存してゐる「かたこと」の補遺といわれる浮世鏡第三について

る。本年五月創立された近畿國語方言学会の発会講演の際に、吉沢義則氏が之を紹介された。名古屋で有名な蔵書家石田元季氏の所蔵稀覯本である。未だ他に類本を見ざる孤本であるが、題して「浮世鏡第三」とあるだけの零本一冊たるは惜しむべきである。幸に序言によって編輯の主旨はわかり、全く貞室の片言の補遺として出来たことが明かである。序言中、京都に片言多き理由を弁じてゐる条は読むに足る。著者の名も年代もわからぬが、編輯及出版は京都であらう。吾妻と西国との言語にも説及ぼしてはゐるが、地方では中国筋の方言が最も多く録されてをる。摂津や近江のもあるが、中国の山陰山陽にわたって備後以东の言語の挙例に富む。篇目の別は、順序も「片言」と違ひ、稍詳密である。記載的な部分が多くして標準論的な部分は稀である。挿絵三頁を入れてあるのを異色とする。云々

因みにいう、右の解説文中に見る「名古屋で有名な蔵書家石田元季氏」とは、俳文学の研究者で名著「俳文学考説」（昭和13年刊）がある。金城女専教授を経て、愛知医大予科教授在職中、昭和18年に病没された。名古屋は戦災も甚しく、その貴重な蔵書の

行方が懸念されたが、幸いに名古屋市藤園堂書店を経由して蔵書の大部分は天理図書館に納まり、一部写本の類は未亡人が管理されていたが、之も戦後、愛知県立大学に購入されているようである。古典全集に活字化された浮世鏡^{第三}の原本（木版本一冊）も、今は天理図書館に在庫する。準貴重書扱いであるが、一般人も閲覧することができる。浮世鏡の古版本としては、現存する唯一の孤本かと思われる。

◎木版本「浮世鏡^{第三}」は孤本一冊で、縦107センチ、横150センチの横長小型本。總数21葉、各半葉は15行、一行は凡そ12〜13字詰め。表紙の題簽と巻頭に「浮世鏡^{第三}」巻末に浮世鏡^終と記す。第三巻のみの孤本の故か、刊記は見えず発行所も不明。末尾にある昭和20年4月入庫のゴム印は天理図書館の印である。

◎雑誌「方言」の四巻七号（昭和9年7月）、佐藤鶴吉氏の「片言直し」と題する論文中に、

○「浮世鏡」第五巻の「雑字之部」以下…（2頁）

○浮世鏡第三巻の抄録…（2頁）

○貞享五年刊の浮世鏡…（2頁）

○浮世鏡^{第三}…（3―4頁）

○貞享五年浮世鏡 洛陽山人彈松（この人は諸芸小鏡の著者彈松軒と同一人であらう）…（5頁）

と浮世鏡の名が頻出するが、現存浮世鏡^{第三}と或いは一致し、或いは違う所あり。書き振りから察するに、佐藤氏は浮世鏡五巻本

を実見していたのではあるまいか。

◎岩波版「国書總目録」に、

浮世鏡^{第四}一冊^①貞享五刊^②三井とある。旧三井文庫には四巻本の浮世鏡が実在していたのである。旧三井文庫には四巻

去る52、8、18、財団法人三井文庫（中野区上高田五十一六）を訪ねた。もはやと期待した浮世鏡はやはり在庫していなかったが館員が親切に調査して下さった結果は、

「戦後、三井財閥は解体した。旧三井文庫は品川区豊町（現在文部省の国文学研究資料館）昭和52、7、20、開館・史料館一同22年開館の在る所）に在ったが、戦後、この土地は文部省に売却された。現三井文庫は昭和40年に、現在地に移って商業経済を中心にして再建されたが、その時点での書類を見ると、

浮世鏡四 合本一 9046 欠本とある。欠本となった理由は判明せぬが、或いは寄託本だったのかも知れない。戦災で焼失したのではない。ともあれ、現在は文庫に存在しない。云々」
との事であった。右の話では焼失したのではない由だから、或いは何処かに蔵されていて、今後出てくる可能性はある。

◎慶大図書館の斯道文庫から刊行された^{江戸時代}書林出版書籍目録集成

（四冊、昭和37―39）に、

(1) 益書籍目録（元禄五年刊）仮名和書の条

五 うき世鏡

(2) 益増書籍目録大全（元禄九年）かなの部

五 うき世鏡

(イ)同 (元禄九年 宝永六年増修)

五 うき世鏡

(ニ)同 (元禄九年 正徳五年修)

五 うき世鏡

とある。何れも刊行年月日、版元の記載はない。但し(イ)は元禄五年刊の書籍目録であるから、之に載る「うき世鏡」の刊行はその以前であり、次に(イ)(ウ)(ニ)の四者ともに、五 うき世鏡 としてゐるから、五巻又は五冊であつた事を知る。

然らば浮世鏡の完本は五巻(五冊)で、その刊行は(イ)の元禄五年(1698)より早く、但三井文庫が記す貞享五年(1688)の刊記は背づくに足る。後述する如く、元禄期後に盛行する重宝記の類と浮世鏡との関連は深い、すべて浮世鏡が先行し、重宝記の類が後塵を拜しているを見て差支えはない。

二、浮世鏡第三の内容項目と、かたこととの関連

イ、浮世鏡第三がかたこと補遺と言われる所以

序文にいう、

此巻より下は詞のあやまれるををしるし侍る也。これよりききに俳諧師貞室が片言の書五冊をあみて世におこなひぬ。これにもらしたるをかき侍れば更にひとつ事にあらず。此故に是にもれたるは彼書にありと知給ふべし。

「かたこと」の補遺といわれる浮世鏡第三について

之をふまえて、新村博士は本書を「片言補遺ともいふべき」ものとし、更に

序言によつて編輯の主旨はわかり、全く貞室の片言の補遺として出来たことが明かである。

と言う。かくて遂に古典全集活字本には

浮世鏡第三(片言補遺)

と題されている。

以下、篇目並びに本文を詳細に検討して見る。

ロ、浮世鏡第三とかたこととの関連

1、篇目の比較

本書の篇目は都名所之部并余国以下18項目を立てている。かたことと比較すると、かたことは巻三の半ばからではあるが、篇目を序して

○時節 ○人倫并人名 ○衣服 ○器材 ○支体 ○病名 ○木
○草 ○虫 ○魚 ○鳥 ○獸 △飲食 △国名所并寺号 ○居
所 雑詞 湯桶言葉 いはずしても ことかき侍るまじき言葉
の18項目としている。

両者を並べてみると、篇目の数は共に18で全く同じ。篇目の名称も、一致するもの13(○印をつけたもの)、類似するもの2(△印をつけたもの)、異なるのは僅かに3に過ぎず、篇目の面でも、浮世鏡第三はかたことを模倣し踏襲していることがわかる。

2、本文

本文は項ごとに、始めは頭に「。」をつけ(1…39)、次いで「

・」を附した(40:54)が、55項以後はこの表記はない。筆者は調査の便宜上、各項に通し番号をつけた所、總計310条になった。

(頭註 52、10、15、私家版 浮世鏡第三)

左に通し番号と各項の題号を掲げて表示し、その下に関連するかたこと(笠間源書)の項目番号(「かたこと」による)を併記して、両者の関係をみる。

浮世鏡第三 「かたこと」 関連項

都名所之部并余国

めんしよ	241	寺号之部	17 ゑべす川通	613
1 じうらく		18 ぶんかう寺	16 ごまら通	
2 二条のばんば	600	19 まんじやうじ	15 ちやうめんじ通	
3 うち井		20 ちやうにん	16 ごまら通	
4 あぐ井		21 ちやうめんじ		
5 うぐるす		22 けんねんじ		
6 しつはら		23 どうけるん殿		
7 なるたけ		24 ふつだいじ		
8 にぶ	602	25 あみだいし		
9 ろくんで		26 しんにやうだう		
10 よこおち		27 とうほくゑん		
11 よしむね		28 じやこじ		
12 かんまき		29 せんぐわんじ		
13 こんがうせ		30 あんにやうじ		
14 あんなこうじ		31 ていやん		

32 みえんど	624	33 ちやうごんだう		
34 せんにようじ	622	35 とふくじ		
36 ふどんだう		37 ほんごゑん		
38 へんじやうじ		39 弘通所		
40 かんぱく殿		公家之称号官職等之部		
41 たかつか殿		42 くはんじやうじ殿		
43 てぶり三条殿	604	44 からすま殿		
45 おきまち殿		46 なんばん殿		
47 とびのこじ殿	598	48 れいせい殿		
49 いせのさいしん殿	599	50 しつのふ		
51 とびの尾	404	52 にんぶ		
53 かげい		54 はいと		
55 づしやう		56 とのむ		
57 もんどう		58 かずへ		
59 たのむ		佛名之部并祖師		
60 めうり観音	607	61 観音も		
62 じよ観音		63 せんじ観音		
64 せいしゆ廿	608	65 こくぞ		
66 こぼう大師		67 れんぎやう大し		
68 くわんだい大し		69 もつけ和尚		
70 じよ一國師	334	71 禪宗のせいと		
72 しうと大夫	73	人倫之部		
73 あがみ		74 身ども		
75 しゆしやう		76 おとうと		
285				

77	おほ大名								
78	げんぶくしや								
79	人こんじよ								
80	じしや衆								
81	ずちやう								
82	こつちやう								
83	せいらい								
84	ほいと								
85	年寄								
86	まどころ								
87	家美様								
88	おへや								
89	うら								
90	そなた								
91	そなた								
92	わこれ								
93	おのし								
94	だんなん								
95	かむろ								
96	かしき								
97	わかし								
98	びくにん								
99	ぼん様								
100	しやうに								
101	二親のふたおや								
102	あにき								
103	はしおりかごみ								
104	ゆわらぢ								
105	かんのし								
106	ばんじよ								
107	ばくろ								
108	たかんじよ								
109	わろ								
110	御れうに								
111	あきうど								
112	だれぞ								
113	だいつめ								
114	こいつ								
115	めうとつがひ								
116	あんだら								
117	三談								
118	類字								
119	くちびろ								
120	あげ								
121	つらかばぢ								
122	ほうげた								
123	みこたぶ								
124	みこせ								
125	たましん								
126	しりべた								
127	しはくた								
128	いび								
129	わきばら								
130	手								
131	め								
132	あきじり								
133	あかぎれ								
134	あせも								
135	ほろせ								
136	だつこ								
137	こひ								
138	瘰五郎								
139	にやく								
140	かゆがり								
141	よだれ								
142	つはけ								
143	うはし								
144	おこぜ								
145	かれ								
146	とびいほ								
147	おなぎ								
148	じやこ								
149	がぎみ								
150	たのし								
151	くしおび								
152	はやむさ								
153	ほじろ								
154	かつこ鳥								
155	ひよどり								
156	あひる								
157	とんび								
158	ぎよくし								
159	たのき								
160	おほかめ								
161	おさぎ								
162	けつね								
163	りす								
164	うごろもち								
165	おなめうじ								
166	こていうじ								
167	虫之部								
168	鳥之部								
169	獸之部								

「かたこと」の補遺といわれる浮世鏡第三について

167	ほたる	534	189	しろう	511	234	よきり	745
168	めこず	534	190	びやくぜつ		235	よきもと	
169	とんぼ	530	191	だいおん		236	よきりごんめ	
170	いぼじり		192	ぶくりう		237	よんべ	
171	せび	537	193	たんは		238	ひくらもと	
172	へこきむし		194	くはつろうこん		239	かひ日のぐれ	
173	がいろ	536	195	こぶし		240	ひにごて	
174	たのし	535	196	ちんひん	588	241	やばなし	
175	ぼふりむし		197	こおれん		242	ありやけ	
176	こめ打むし		198	ちやうぜん		243	暁	
177	ぶゆ		199	えうれたん		244	あとげつ	
178	しらめ		200	そこゑん		245	ぼに	
179	ひらたぐも		衣類之部			草之部 <small>竹</small>		
180	むしこうぐ		201	きり物	352	246	さこぎ	
食物之部			202	さいみ		247	いちじく	
181	くはしん	577	203	たふぬの		248	ほづき	
182	ちをせん		204	のゝ		249	ほうれんさう	
183	せんべ	575	205	もんめん	355	250	ほんだはら	
184	こはい	581	206	つつきん	361	251	ひづる	
185	しらかい	590	207	てぬぐひ	368	252	ひよう	
186	じぶ		208	ておひ		253	ゆうがう	
187	よふめし		209	ふんどし		254	そぐりわら	
188	この物	582	210	きぬけんふ		255	わらすば	
薬種并合葉之部			居所之部			256	しのべ竹	
			211	しゝでん		時節之部		
			212	げんくは		221	正月の元三	
			213	ろうぢ		220	年の始	
			214	へいちもん		222	さぎつちやう	
			215	ゆるり		223	はるゝべ	
			216	ゑ		224	しよんぐはつ	
			217	らんか		225	にはがよい	
			218	邸 <small>出屋</small>		226	いつつも	
			219	せんち		227	いんぜん	
			220	し		228	きによふ	
			221	はる		229	さくづゝ	
			222	はる		230	おとつひ	
			223	はる		231	ひつてい	
			224	はる		232	常住	
			225	はる		233	いりやひ	
			226	はる				
			227	はる				
			228	はる				
			229	はる				
			230	はる				
			231	はる				
			232	はる				
			233	はる				
			234	はる				
			235	はる				
			236	はる				
			237	はる				
			238	はる				
			239	はる				
			240	はる				
			241	はる				
			242	はる				
			243	はる				
			244	はる				
			245	はる				
			246	はる				
			247	はる				
			248	はる				
			249	はる				
			250	はる				
			251	はる				
			252	はる				
			253	はる				
			254	はる				
			255	はる				
			256	はる				
			257	はる				
			258	はる				
			259	はる				
			260	はる				
			261	はる				
			262	はる				
			263	はる				
			264	はる				
			265	はる				
			266	はる				
			267	はる				
			268	はる				
			269	はる				
			270	はる				
			271	はる				
			272	はる				
			273	はる				
			274	はる				
			275	はる				
			276	はる				
			277	はる				
			278	はる				
			279	はる				
			280	はる				
			281	はる				
			282	はる				
			283	はる				
			284	はる				
			285	はる				
			286	はる				
			287	はる				
			288	はる				
			289	はる				
			290	はる				
			291	はる				
			292	はる				
			293	はる				
			294	はる				
			295	はる				
			296	はる				
			297	はる				
			298	はる				
			299	はる				
			300	はる				
			301	はる				
			302	はる				
			303	はる				
			304	はる				
			305	はる				
			306	はる				
			307	はる				
			308	はる				
			309	はる				
			310	はる				
			311	はる				
			312	はる				
			313	はる				
			314	はる				
			315	はる				
			316	はる				
			317	はる				
			318	はる				
			319	はる				
			320	はる				
			321	はる				
			322	はる				
			323	はる				
			324	はる				
			325	はる				
			326	はる				
			327	はる				
			328	はる				
			329	はる				
			330	はる				
			331	はる				
			332	はる				
			333	はる				
			334	はる				
			335	はる				
			336	はる				
			337	はる				
			338	はる				
			339	はる				
			340	はる				
			341	はる				
			342	はる				
			343	はる				
			344	はる				
			345	はる				
			346	はる				
			347	はる				
			348	はる				
			349	はる				
			350	はる				
			351	はる				
			352	はる				
			353	はる				
			354	はる				
			355	はる				
			356	はる				
			357	はる				
			358	はる				
			359	はる				
			360	はる				
			361	はる				
			362	はる				
			363	はる				
			364	はる				
			365	はる				
			366	はる				
			367	はる				
			368	はる				
			369	はる				
			370	はる				
			371	はる				
			372	はる				
			373	はる				
			374	はる				
			375	はる				
			376	はる				
			377	はる				
			378	はる				
			379	はる				
			380	はる				
			381	はる				
			382	はる				
			383	はる				
			384	はる				
			385	はる				

257	なひ竹	
258	しんまい	
259	わたし	
260	めんよう	
木 之 部		
261	ひらぎ	
262	くのぎ	
263	びやくしゆん	
264	ごよの松	
265	なつてん	
266	ゑんじゆ	
267	びや	
268	薪の柴	
269	柴のをれ	
器 財 之 部		
270	ほうこ	
271	ひちりき	
272	しやみせん	
273	とびやくせう	
274	いりがうら	
275	よぼし	
276	こひのよぼし	
277	どごもとひ	
278	もとひ	
402		
403		
403		
370		
500		
240		

27 ⁹	うろこがた	
280	とつくり	
281	わりぎやう	
282	こうろけ	
283	れいてんぐ	
284	ふんどん	
285	わけもの	
286	ゆびつなり	
287	ぶんこ	
288	ふせがう	
289	かうろん	
290	こうり	
291	じんどう	
292	しもく	
293	あくた	
294	ますかけ	
295	とかけ	
296	あんどう	
297	とうしん	
298	ひそく	
299	ごつたい	
300	れんぎ	
301	てつきう	
302	まいのは	
378		
410		
392		
396		
397		
418		
457		
388		

「かたこと」の補遺といわれる浮世鏡^{第三}について

303	けいさん	307	万どうろ
304	はつけい	308	できのぼう
305	やつくはん	309	つえぼし
306	しんし	310	竿
437		46	

右表にみる如く、かたことと重複、もしくは類似するもの91項、その数は実に三分の一近くに達する。

これ「かたこと」にもらしたるをかき持れば更にひとつ事にあらざ。此故に是にもれたるは彼書にありと知給ふべし。(序文)

という浮世鏡の著者の抱負にも拘らず、かたことの影響は右にも見るように大きく本書に及んでいるのである。

3、かたことと相違する面

イ、表記の面

a、挿絵

三面の挿絵(不動堂一四才、三談の図一十才、たばこの葉を刻む図一十八ウ)あり。

b、句読点

かたことは序文を除くの外は、つとめて句読点を施しているが浮世鏡^{第三}は序文・本文とも句読点なし。但し左の七カ所には「。」がある。

- 90 田舎には。
- 91 ……うら共。
- 92 わこれ…といふ事を。あの…

232 常住といふ事をよつびとひ。
 258 …わたしが。てしゆにつくりたでござる。
 270 京の詞也。

ロ、方言採取の範囲

かたことは都のことばを中心とし、方言言としては、
 えぞが千島のこと葉 北国こと葉 坂東ことば あづまこと葉
 近江こと葉 近江丹波 豊後のこと葉 唐国人のことば(唐人口)
 南蛮言葉
 であつた。

浮世鏡第三では

大和 河内(後に和泉と分れる) 京 津国…五畿内
 近江 丹波 丹後 播磨……………近畿地方
 中国 備前 備中 備後 但馬 美作…中国地方
 東(吾妻)
 西国

の16で、うち国名12、地方名3(中国 東 西国)、都(京)1であ
 る。

なお京の地名の外、姫路 江戸 が出る。

浮世鏡第三も京言葉を中心に扱うが、備前・備中・備後など中
 国筋の詞が頻出するのが注目される。著者が何等かの意味でこの
 地方と関連があつたのであろうか。

ハ、正言と見るか、かたことと見るかの判断の
 相違

前述の如く、浮世鏡第三の発想・筆致はかたことの大きな影響下
 にあるが、中には少数ながら、一部に或いは全く意見を異にする
 ものがある。例えば

浮世鏡第三

(かたこと) (正言)

60 くはんをん くはんのん

70 万^{まん}霊^い上人

132 あきじり ^{あきすべ}青首

224 しよんぐはつ 正月(にん月
しん月同じ)

271 ひちりき 簀栗(しちりき)

300 れんぎ 榎木(れいぎ)

榎植(すりこぎ)

308 できのぼう でくるぼう で

く 吾妻の詞。
 でこ てぎのほ
 うは中国の詞也
 傀儡子。

かたこと

(正言) (かたこと)

607 観^{くはん}音^{おん}堂^{だう} くはんのど

236 三界の万^{ばん}霊^{れん}… ばんれいとほよ
ます。

493 清^{あき}盲^{しゆ}を あきじり

281 二月を にんぐはち^共

四月を しんぐはち^共

370 簀栗^{ひちりき}を しちりき

378 摺^{すり}胡^こ木^ぼ…れんぎといふもおか

し。…雷^{らい}木と書歟。

46 でくるぼうといふべきを てこ
 のぼうといふは如何。詩に傀儡
 と作りしは此事成べし。

二、表現がいわゆる「かた言直し」(正譌)の型に墮す

かたことは京ことばの雅正を志向し、かたことの矯正を目ざして音韻に語法に文字に諺に、豊かな発想と巧みな理論を展開して、

正語^(A) かたこと^(B) 批評^(C)

の正攻論法にて話題を提供し、特に(C)の批評では、必ずしも「悪し」「誤なり」。でなく、言語の変化・推移を認めて、かたことと雖も悉く之を却けるのではなく、時には「よし」「苦しからず」と言い、或いは判定を読者に委ねるなどの余裕も示して、広く世人の共鳴を得た。

浮世鏡は前者の補遺を意図しながら、しかし着想の範囲は至って貧しく、その論法も

A (かたこと) B (正言) C (説明)

じゅうらく 聚楽也 西京にあり

と誤れる(A)かたこと(殆ど音声面の訛音語)をば先ずあげて、単調に(B)で之を正すに過ぎず、前者かたことに見られた奥行の深さが無い。新村博士が、

記載的な部分が多くして標準論的な部分は稀である。(157頁参照) という所以である。

この傾向は浮世鏡以後も続くので、例えば

諺草(七卷 貝原好古 元禄14年刊)の汎例にいう、

児女のいひあやまれる片言、都鄙ともに少からず。さきに都の人、片言とかやいふ書を作り、それより後も、なほ弁正を加へ

「かたこと」の補遺といわれる浮世鏡^{第三}について

たる書も出来ぬ。

この諺草は「いろは」分けて、其のい、は、ほ、と、ち、り、ぬを、わ、か、よ、た、れ、そ、つ、ね、な、ら、む、う、の、くや、ま、け、ふ、こ、え、て、あ、き、き、み、し、せ、の35項末には「正譌」を掲げる。

例えば「伊」の条では 石垣いしがきなど15条をあげるが、うち11 (石垣 忌 椅子 忽諸 早晚 いわし いらあひ いかい 云 甲斐なし 今卒土 いるか) はかたことよりの抜萃で、異なるのは僅か4 (煩悶 否 努力 何時) に過ぎず、論法も至って単純である。

かたことが折角新生面を開拓して言葉論の正しい展開を試みたに對し、その影響を受けて後続する人々は多かつたに拘らず、徳川期を通じて、遂に之を凌駕する書を見なかつたのは残念である。

三、浮世鏡第三と不重宝記大全との関連

イ、不重宝記大全について

現在は下巻のみ存す。編著者未詳。元禄4年(1692年)刊、大阪秋田屋版。昭和52年3月、勉誠社より覆刻版が出て、今は誰でも見易くなった。

「重宝記」の名は元禄以後盛んに用いられ、(男重宝記―元禄6―の序に、「…當時重宝記と題する書十有餘種あり…」)一般生活上の簡易事典として各種のものが刊行された。岡田希雄氏は「元禄期の辞書界」(立命館文学三巻8号―昭和11年8月)で、重宝記の類

書を列挙して、

重宝記は便覧とは云つても、辞書とは云ひかねる。(30ペ)

と評している。著者或いは編者が、自ら学究的に探求したものではなく、世人に役立ちそうな項目を類聚し、時には勝手に他書より引用したり抜萃したりした。従つて著者不明の書も多く、書肆が適当に編集したものも多いのであろう。

本書下巻の内容は

第一、初学文章抄に始まり、第八、諸国かた言に終る總計百九十丁の各種便覧である。

口、不 重宝記大全の第八「諸国かたこと」は浮世

鏡第三の抜萃

重宝記の類が、或いはかたことの影響を受け、或いは浮世鏡と関連を持つことは、先覚が既に之を指摘している。例えば

1、先述せる新村出氏が、古典全集のかたことの解説の後に、片言解説増補として追記の中に、世話重宝記(五巻 元禄8年刊)その他の類書とかたこととの関連に觸れており、

2、大田栄太郎氏が男重宝記(五冊本 元禄6年刊)の「日本諸国詞づかひ」、「かた言なをし」を調査して、前者は38項中の10、後者は87語中の52語が、浮世鏡^{第三}と類似しているという。(苗村文伯の略伝―男重宝記と浮世鏡との比較― 国語と国文学17巻11号)

今こゝでは、不重宝記大全の「諸国かたこと」の条と浮世鏡^{第三}

とを比較対照し、両者の関連を見る。

浮世鏡第三

序文

一都名所之部并余国

39…1

二公家之称号官職等之部

59…40

三佛名之部并祖師

72…60

四人倫之部

118…73

五支脉之部并病名

142…119

六魚之部

不重宝記大全

序文(上とは異なる)

都名所之部

13項

公家方并官職の事

9項

佛名乃事

7項

人倫乃部

26項

支脉之部

13項

魚之部

「かたこと」の補遺といわれる浮世鏡三について

…201	十二衣類之部	200…189	十一薬種并合薬之部	188…181	十食物之部	180…167	九虫之部	166…159	八獣之部	158…152	七鳥之部	151…143
10項		12項		8項		14項		8項		7項		9項
5項	衣類乃部			8項	食物乃部	6項	虫乃部	6項	獣乃部	4項	鳥の部	6項
		310…270	十七器財之部	269…261	十六木之部	260…246	十五草之部 <small>付り竹</small>	245…220	十四時節之部	219…211	十三居所之部	210
		41項		9項		15項		26項		9項		
	85項	言語之部	器財乃部	6項	木乃部	12項	草之部	18項	時節乃部	5項	居所之部	

(終)

右の比較対照表を見て気付くことは、下段重宝記は、上段浮世鏡^{第三}の類別にならうては、同じ類別を設け、同じ順では半数を抜いており、新しい語句の挿入はない。但し十一葉種^非合葉之部は重宝記になく、逆に「十八」言語之部85項の抜萃源は浮世鏡^{第三}に見当らぬ。

右に拠れば、下段重宝記の、最後「言語之部」85項を除く177項は悉く上段浮世鏡^{第三}の310項よりの抜萃である。恐らく言語之部85項も重宝記編者の独創ではなく、然るべき抜萃源があつたに違いない。

先にも引いた佐藤鶴吉氏の論文（方言四卷7号「片言直し」）には^{断不}重宝記大全（下）の第三、万世話（難）字盡は、最近世に出た浮世鏡^{第五}卷の「雑字之部」以下の各節（草木、魚鳥、虫、獸、人倫支體、不仁^{かたむね}並病、食物に分つ）の抜萃であると言っている。然らば浮世鏡^{第三}に続く第四に、右の言語之部85項の抜萃源となるような資料もあつたのではないかと推察するのは強ち不当でもあるまい。